# レンカのオシゴト！

沙縞　宏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
レンカのオシゴト！

【Ｎコード】
Ｎ９１０３Ｆ

【作者名】
沙縞　宏

【あらすじ】
学園でも屈指の美少女、椎名崎蘭。彼女は幼馴染の美海悠太に想いを寄せていたが、素直になれない性格のせいでいつまでたっても二人の仲は友達以上にはなれないでいた。だがそんなある日、親友の梅園紅葉に勧められた「恋のおまじない」をすると目の前にジャケット姿のジョニー城田と名乗るオッサンが現れる。戸惑う蘭だが、実際は蘭の恋を叶える為に神の世界からやって来たのだと言う。微妙に噛み合わない二人は恋愛成就に向けて走り出すが…

## プロローグ：出会い（前書き）

こんにちは、沙縞　宏です。かなり未熟な内容ではありますが、温かい目で見守って頂ければと思います！

楽しんでいただければ幸いです！

## プロローグ：出会い

恋はいつでも思い通りには行かないもの。恋しい人をただひたすら思い続けるだけかも知れない。

でも、そんな歯痒い思いをすごく良く理解して助けてくれる、兄弟の様な、相棒の様な、そんな特別存在が側に居てくれたら…。

これはそんな少しだけ特別な青春のお話。

「蘭ー、写ってんのあった？」

「あんまり…探すの大変だよねぇー」

日の傾く校舎でわいわいと騒ぎながら体育祭のスナップ写真を眺める1人の女子高生。

名前を椎名崎蘭（しいなざきらん）という。

普遍的高校生にして、帰宅部員。だがそこに、男子に大人気の美少女いう言葉が付く。

「そーゆー、紅葉（もみじ）は見つけたわけ？」

「当ったり前じゃない！あたしの活躍どころといったら体育祭（コレ）しかないもんね。写真は探せば結構あんのよ」

両腕でガッツポーズをして、笑って見せる。

「ははは、さすが肉体派ね……」

「あ、そういえば見つけてたよ！写真！！」

その言葉を聴いた瞬間蘭は口を尖らせる。目はいかにも不満げである。

「何、その興奮は？どうせ、ダーリン、でしょ！」

蘭は力の限り右手の人差し指で紅葉の指輪を指した。相当の力を

入れているのか、手全体が小刻みに震えてる。
「どーどーどー、お馬さん。ダーリンじゃないっす。と、なれば？」
「ゆ、悠太（ゆうた）の？」
「ご名答〜！ハワイ三泊四日の旅をプレゼント！ほら、そこの右端右端」
蘭の視線は指差された方向を凝視する。
目当ての写真を発見すると、気の抜けた顔で申し込み用紙に食いつく様に急いで写真の番号を記入する。
「蘭の純情もいつか受け入れてくれるさ、わっはっは」
「むぅ、何か素直に受け取れないわ…。まぁいいや、あたしはもういいけど、そろそろ帰る？」
「合点承知の助！」

「センパーイ！」
「おう！帰ってきたか。どうだった、初めての仕事は？」
「いやいや、それがもう……」
「はっはっは。だれだって初めは大変なもんだ。ま、そのうち慣れる慣れる」
ごくありふれた会社で耳にする会話のようにも聞こえるが、人間（リーマン）の会話ではない。
この世界ではない、神々の住む世界。
大自然の全てを凝縮した潤い溢れる楽園世界、ではなく高層ビルの立ち並ぶビジネス街と形容した方が正解に近い。ここは八百万の神々の「職場」なのだ。
その一角、並みのビル群よりも少しだけ高い位置にオフィスを置く人間系統運命部恋愛課、通称恋課（レンカ）。ここでは人間の恋愛に関する運命の管理をしている。
「ま、でも現地の仕事はボンボンねぇから要領だけ覚えとけ。…お

っとこんな時間か、部長に呼ばれてんだ！じゃな」
部下の肩を挨拶代わりに叩いて小走りで去っていった。

「おぉ城田君、来た来た」
貫禄ある髭が城田を手招きする。
「さてさて、そろそろ捩れを…現地の仕事をして貰おうかなと思ってな」
「捩れ直しっすね？」
手でドアノブを回すような仕草をする。
「そうそう。それに今度の総務の薬師寺部長、うちの事はあんまり良く思ってらっしゃらない。だから、しっかり仕事してきてくれ…。このままじゃ、運命部に統合されてしまうよ」
「ええ！？確かに自然系統、鬼の系長ならやりかねないっすね…。わかりました、がっつりやって仕事してきます！」
ビシッ！っと敬礼してみせる。

と、言う訳で是非ともあたしとダーリンの縁を取り持ったおまじないをやってみそ！これが効くんだ！
「んな事言われてもねぇ…。まぁでも、これで、悠太と、仲良く、なれるの、なら、ね……」
自室で1人もじもじしながら頬を赤らめる蘭。
そして、机に並べているお気に入りの香水を手に取る。
大きく深呼吸をすると目を見開いて
「えと、右手首に、左手首、拍手して」
「とぉう！」
豪快な揺れと共に、蘭の部屋に突如として男とアタッシュケースが現れた。
男はの髪はオールバックで固めて黒光りのジャケット姿で、顔立

ちから４０歳位に見える。
「お初にお目にかかる！俺は…」
ママァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！！！！！！！
階段をばたばたと駆け上がる音が聞こえ、直ぐに蘭の部屋のドアが開いた。
「どうしたの！？泥棒！？」
ぶんぶん。
「じゃあ何？まさか、ゴキブリとかであんな大騒ぎした訳なの？」
腰に手を当てて呆れた様な顔つきになった。
ぶんぶんぶんぶん。
「じゃあ何？」
人差し指で男を指差す。
「え？壁がどうしたの？」
母は蘭が指差した男のさらに先の壁を見て、少し悩む。
「壁に何か付いてるの？あら、まさかネズミかしら？嫌ねぇ…。もう、ママに迷惑掛けないでね！」
ドア少しだけ乱暴に閉めてまたばたばたと階段を降りる。
涙で目を潤ませながら枕に抱きついたまま動かない蘭。
ジャケット姿で突っ立つ男。
気まずいような何とも言えない空気が流れる。
「あー、あのなぁ…。君が呼んだんだろ？」
男が先に口を開く。
「へ？」
「何言ってんの？みたいな顔をするんじゃない！やっただろ、呼出（おまじない）をさぁ」
「あれの事？……うそ、ホントに紅葉の言うとおりだ！やったぁ！！これで、これで、ついに！」
急にベッドの上で飛び跳ねてみせる。挙句に枕を胴上げの様に放り投げて喜ぶ。

「おーい、それよりだね、自己紹介が未だじゃないか？」
そう言うとジャケットの内ポケットから名刺を一枚取り出して、両手で蘭に差し出す。
蘭も軽く会釈するようにしてから取って、まじまじと眺める。
「人間系統、運命部？恋愛課？」
「ジョニー城田だ。よろしくな、君とは上手くいきそうだな」
無理やり握手をして蘭の華奢な腕を振り回す。
「あ、あたしは椎名崎蘭よ。というか、突然出てきてさ、縁結びの神様とか？」
「んまぁ、良い線いってると思うぞ。だけどなぁ、う～んそうだな、神様が会社の社長ならその会社の社員かな、俺」
「だから恋愛課！？」
ジョニーを指差して、尋ねるように言った。
ジョニーも、んなもんだ。と答えてアタッシュケースの中身を広げ始めた。
中からは薄汚れたノートが何冊かと、手のひらサイズの携帯端末の様な機械が一つ。他にも駄菓子やらインスタントラーメンも出てきた。
「さて、椎名崎…じゃあ面白くないな。蘭たんって呼ぶ」
「蘭たんって…何かキモイ！」
げふっ！？
次の瞬間にはジョニーは鳩尾の辺りを擦って倒れこんだ。
「んにゃろ、少しは手加減せい！いいか、俺だって基本は人間と一緒なんだから肩とか殴られたら痛いの！」
へぇ、と肩に一発。
ぎゃう！
「ら、蘭さん、どうしてそんな、ツメタイノ？」
自分の肩を渾身の力で押さえる。
「夢だから」
「は？」

分け解らん。ジョニーの顔はそう言っていた。
「だって、神様モドキが出てくるとか、良く考えたら夢じゃん。ていうか、ジョニー城田って…売れない芸人？」
「だから軽～く、恋をかなえてやる！みたいな発言が癪に障ると？」
うんと頷いてから電気を消すと、ベッドに潜り込む。
ジョニーも参ったと言わんばかりに大きく溜息をつく。昔はみんな一発で信じてくれたのにと心の中で少しだけやり辛さを感じる。
夢オチで片付けられるとは！
自分に背を向けるように眠る欄をじっと見て考える。どうしたら信じてくれるだろうか？
「そうだ…」
携帯端末とメモを片手に蘭の机で何かを書き始める。

## プロローグ：出会い（後書き）

投稿は初めて…ではないのですが、昔ちょこっとこちらのサイトで違うＩＤで投稿した頃もありました。

それはさておき、ここまで読んでいた頂きありがとうございますｍ（＿）ｍ

これからも頑張りますのでよろしくお願いします！

## 朝日は昇る：1

蘭の目覚めは最悪だった。昨晩の酷い「夢」のせいだ。
ジョニー城田と名乗る謎のオッサン。しかも神様の部下。おまけにあたしの恋を叶えるって？
そんな簡単に叶ってたら約１０年越しのこの思いは何なの？少しだけジョニーを恨めしく思った。
でもある意味あたしの願いだったのかもしれない。叶って欲しいから夢までそんな風になる。なら仕方ないかなぁ。
さっさとベッドから起き上がると食卓までふらふらと階段を降りて行った。
「あ、蘭おはよう！」
階段を降り切った辺りで家を今から出ようとする母に出くわした。
「あれ、もう出勤？」
「そうなの、ちょっと会社の予定が変わっちゃってね。朝ご飯は用意してあるから、それじゃあね！」
いってらっしゃーい。眠い目を擦りながら食卓に向かう。
食卓に向かうと湯気の立つのご飯と味噌汁が置いてあった。皿ごとラップが掛けられた焼き魚も食欲をそそる。
「ん？」
朝食の他に蘭は2通の手紙を見つけた。
片方は直ぐ見て分かった。ママの字だ。きっと入れ違いになった時の為に書いたのだろう。
だがもう1通は？
しかもご丁寧に封筒にしまってある。達筆な字で、椎名崎蘭様と書いてある。
手に取って裏を確認してみた。
「な…」
蘭は途端に目が覚めた。それもそのはず、差出人の所にジョニー

城田と、これまた達筆な字で書いてあったのだ。
「夢じゃなかったの！？」
早速中身を確認してみる。

おはよう、蘭たん！まだ肩痛い…（泣）
はっはっは、昨日はよくもｗｗｗ俺を、夢オチにｗｗｗ
というかこの手紙見ればもう夢オチじゃ済ませられないだろうけどな☆
かといって君は未だ信じないだろうから、証拠を用意したＺＥ！
証拠っちゅうのは「今日の学園恋愛予報」だ！コレが全部的中したら信じなさい！

「こんな星マーク見たこと無いよ…」
クスクス笑うと食事を始める。
蘭の心には、その嫌に達筆な星が輝いて見えた。

校門に続く長い並木通り、１人で登校していると、大抵はかなりの数の男子生徒に話しかけられる。蘭の人気の賜物だ。眠いとは言え挨拶をされたら返さない訳にもいかないので、隈の目立つ目でにっこりする。男子の顔はもちろん引きつる。
「モテ子、おっはよー！あれぇ、お眠（ねむ）かな？」
紅葉が後ろから声を掛けてきた。
「ふぁーい。梅園紅葉様、おはようございます…」
会話の噛み合わなさに肩透かしをくらいつつ、
「まさかまさか、昨日、一杯いっちまいました？」
お猪口でくいっとするポーズ。
「違う、違うよ。ただ、かなり眠い…」
ジョニーが本物であろうと無かろうと関係なく、蘭はほとんど眠

りにつけなかった。何度も何度も目が覚めて、その度にジョニーが最初に現れた辺りを眺めた。
「あ、そうそうやった？おまじない！」
おまじないと聞いてビクッと肩が上がった。
「え、蘭どうしたんだい？効果があった感じかな？」
「いや、もう効果がすごいというか、何か従者召喚的（オッサンしゅつげん）な…」
「オッサン？まぁでも効果があったなら良いよ！楽しみだなぁ、ダブルデートも夢じゃないよぉ！」
蘭は苦笑か微笑か良く分からない笑顔で返すと雑談しながら二人、校門まで歩いた。

科学の実験中に吉田君、まさかの告白！矢田部さんを観察し続ければ一目瞭然！
「んなアホな…」
と言いつつも科学の授業中クラスメートの矢田部由里を気にしていた。
「蘭はさっきから何を見てるんだい？ん、矢田部氏？何故かね！？」
「え、いや、何かありそうな気がするよーな、何だろう…そう、第六感（クスセンス）があたしを呼ぶの！」
「第六感（おんなのカン）ですね。ふふふ、確かに可愛いですよなぁあの娘。そうでっしゃろ、お代官様ぁ？」
フラスコをワイングラスの様に揺すってみせる。しばらく代官&越後屋ごっこをしていると、「来た！」
蘭は思わず小声に叫ぶ。
吉田雄太郎が矢田部由里に近づと、矢田部由里の耳元で何か呟く。
耳元から離れると矢田部由里は手に持っていたビーカーを床に落とした。
「ありゃまー。なーにを話したんだろうね、吉田氏」
「いや、でも未だ決まったわけじゃ…」
「越後屋、どうした！？」

蘭は呪いを唱える様にぶつぶつと呟き続けた。

その日の放課後にもなると蘭は寝不足に覆いかぶさる様に精神的にも疲れ切っていた。紅葉も終始心配し続けてくれたが、どうしようもなかった。

「じゃあ、梅園少尉は部活に出動せねばならんので！今日はちゃんと寝るんだよー」

「はーい…」

机に突っ伏したまま手を振る。

放課後にも幾つかの「予報」が残っていたが、これ以上筋書きの分かり切っている青春物語を見ても何一つ面白くないので蘭は早急に帰ることにした。

もう十分信じられるし、こっちの身が持たないわ…。

蘭は朝同様、見るも無残な後ろ姿の女子高生であった。微妙に横揺れもしている。

そんな調子で歩いているので、何度も自転車にベルで威嚇された。歩くだけで（精神的にも）疲れる。さすがに何処かで休みたいと思い、近くのマックの方を向く。

窓際が空いてるし、景色でもぼーっと眺めようかなーーーーーー

「っておい！」

思わず声に出す。ジョニーが座っていたのだが、何故かジュースの入った紙コップを盛大に吸い上げている。ちゅーちゅーと音がここまで届きそうだ。

そんな勢いで飲んだら普通ジュース無くなるでしょ、と思っていたが直ぐに気が付いた。

シェイク、頼んだのね。

小走りでマックに向かい、コーラとポテトを頼むとジョニーの隣に座った。

「おじさんがシェイクなんてこれ以上に無いくらい不釣合いね」

「んんんぐぐぐふぐぅ！！！！！む！？おお、蘭たん！良く見つけぐおぉ！！」
ローファーの踵で一生懸命にジョニーの足を踏んづける。「その、たんって止めんか！」
「ふぅ、というか信じてくれたと言うことかな？」
「ま、まぁそういう事になるかな…。もぉ！だったらさっさとあたしの為に働いてよね！！」
「まぁ、ちょっと話を聞きんしゃいな」
まぁまぁと蘭を抑える。

この世の色恋は全て、恋愛課が管理している。そして、少しでも恋愛に関する因果が狂えば然るべき未来とは違う世界を歩む結果となり、これから先の未来でキーパーソンとなりうる人が誕生しない可能性もある。
だからこそ、狂いそうな因果を正しい方向に持っていく為に人の前に現れては、悩ましき恋心を成就へと昇華させる。それが恋課（レンカ）の仕事なのだ。（人前に現れて因果の修正をするこの仕事を特に「捩れ直し」と呼んでいるそうだが。）
かと言って恋課（レンカ）の連中は誰でも捩れ直しが出来るわけではない。勿論のこと、実績のある物でないと任命すらされないし、何より人間と上手くやり取りの出来る、ある種の才能も必要なのだ。
ジョニーも何だかんだ言ってもうこの仕事も人間世界で言う所の２０年はやっているベテランである。
「という訳だ。直ぐにとは言えないが必ず蘭たんの恋は叶えてやるからな！」
「ん……。」
ポテトフライを口に押し込みながら俯く。
恋課（レンカ）、因果、捩れ直し、真面目に聞いているだけでも馬鹿らしくなる言葉（ワード）だが事実だから仕方ない。妙な納得はあったが未だ何処かで疑念があった。実は今、大っ嫌いな古典の授業で転寝（うたたね）していて、

その間の夢だったりしてとか思う。
　別にそうあって欲しいわけじゃない、むしろこれが現実であって欲しい。だけれど心の何処かに必ずソーダの気泡のみたいに疑いがぽこぽこと、ごく小さいながら出てくるのだ。
「というかさ、ジョニーは」
「おう、蘭じゃねぇか」
　蘭の背中の方から少し低めの声が聞こえる。
「ひ、え、あ！？ゆ、悠太？」
　ういっす、一声。
　チーズバーガー3つにポテトとジュースのLサイズ、更にはチキンナゲットまでトレイに所狭しと重なり合って、いかにも食べ盛りの高校生のトレイである。
　美海悠太（みうみゆうた）は同じクラスで蘭と勉学を共にするクラスメートだ。蘭とは長い付き合いで、小学生の頃から何となくつるんでいる。
　去年から試してみた、ほんのりとした色合いの茶髪は女子にも好評で「芝崎学園イケメンアイドル候補生」の称号を女子の間で付けられている。話しかけやすい雰囲気からか、友達も多い。
「お前1人か？」
「そんなのどうだって……あれ？」
　隣の席を見ると、ジョニーが居ない。何処かに行ってしまったのだろうか？
「…んまぁ1人よ。アンタこそ何で居んのよ？」
　ここに居るなよ！といわんばかりの口調で聞き返す。
「良いじゃねぇか、今日はたまたま部活が休みだったんだよ」
　不機嫌そうな口調だがそうではなく、低めの声とトーンがいつも不機嫌なやる気の無い男子高校生風に仕立てあげてしまっている。
「お、コーラか。貰い！」
　ぱくっ。
「あ……！」
　か、間接、き、きききキス！？

蘭のジュースを平然と飲む。蘭はそれを見ると少しだけ恥ずかしそうな目になる。
「なんだお前、顔赤いぞ。コーラで酔ったか？」
「バカ、うっさい！！」
ジョニーの時は裏腹にパンチもポカポカ、といった感じだ。
「あのなぁ…、バカとかうっさいとか、言うんじゃありません！」
かなり低いトーンと、軽いゲンコツ。
ひゃ！？っと驚く。蘭は最近こんな調子なのである。身体が触れる度に、きゃっとか、うわっとか言って過剰反応（オーバーリアクション）なのだ。さっきの間接キスなんて本当は卒倒モノなのだ。
「まぁいいや。2階で友達待ってるから、行くわ」
思わず、「ちょ、ちょっと待ちなさい！」
なんだか2人だけの時間をもう少し共有していたくて自然と腕まで掴んで引き止めてしまった。
「ん？」
「え、いや、その、な、何か言うこと無いわけ！？」
「何かあったか？…髪の毛微妙に切った事か？」
「へ？まぁ切ったけど……。んん、もういい！さっさと行きなさいよ、もう！！」
「へーい、じゃあな」
蘭の素っ気無い様な態度も意に介さず振り向かないで腕を振る。
一方の蘭は肩に少しだけかかるさらさらストレートの黒髪をずっといじくり回していた。誰も髪切ったの気付いてなったのに…。
普通なら気付かなさそうな所に気付くのが、ズルい。いっつもそう。
だから、だから…
「好きなっちゃう！だよな？」
丁度良い具合に溶けてきたシェイクを楽々吸いながら、青春って良いなぁと呟く。
「い、いつの間に！」

「ナウ！…とは言え見させてもらったぞ、一部始終な。特にあのジュース飲まれた時の顔！一種の萌えだな、ありゃ」
蘭のトレイのポテトを一本勝手食べる。
一方の蘭は顔を手で押さえながら真赤になる。覗きの被害に遭うと初っ端はこんな気持ちなのかな、とか一瞬考えてみる。
「まぁ、あれじゃあ進展無ぇ訳だ。聞いて無かったけどさ、長い間こんな感じでしょ～？」
顔がニヤニヤして、いやらしい。「それに結構イケメンだねぇ、彼。そりゃ、蘭たんだって可愛いよ？」ただのセクハラオヤジ紛いである。
うっさい！と言いつつも、１２０％図星なのでジャブは控えた。
ホントに大丈夫かな…、今度は心配になってきた。
「もう帰るわよ！」
トレイをジョニーに半ば投げるように渡すとさっさと鞄を肩に掛けて歩き出した。「待ってくれよ」と言いつつしっかり分別してごみを捨てると、小走りで蘭に駆け寄る。
家までの帰路では蘭の今までを聞いていた。中学校の卒業式の日に悠太から思わせ振りな事を言われたとか、高校入学したての頃はメールも毎日してたとかそんな話である。
ジョニーは話の切れ目の度に「そりゃ、ツンデレだ！ツンデレ！」とツッコミをいれてはけたけた笑っていた。
家に着いたときには蘭はあれだけ積もっていた疲れも忘れていた。

「ねぇ、蘭あなた今日顔色良いんじゃない？」
夕食の席で母にふと聞かれる。
「そうかな？」
「だって昨日なんか、ほら突然絶叫するんだもの。そりゃママだって心配するわよ。パパなんか現場に居たら大変だったわよ？」
まぁねぇーと苦笑いする。
椎名崎家に住んでいるのは現在蘭と母さくらの２人（プラス謎の

オッサン）だけである。父親は海外赴任で去年から不在、兄もいるが新社会人なので今年の４月頃から１人暮らしである。
「伊吹兄さんも今年から居ないしね。なんか静かになった感じ」
「でも男共が居ないからママは結構楽なんだけどね～。あ、内緒よこんな事言ったの」
食事の時等、蘭が母と居る時間はジョニーは出てこない。家族の団欒の中には入らないのがジョニー流だという。

「お風呂も入ったことだし、じゃあ寝るね」
「は～い、おやすみ」
そう言って階段を上がり自室の入った。
「あれ、電気消えてる？」
居ないのかな？と思いつつスイッチをつけるとベッドがこんもりと山を成していた。丁度大人１人分ぐらいに。
誰が寝ているかは見当はつくが、足音を立てない様にゆっくりと枕の方を確認して近づくとジョニーが口をぽかーっと開けてスースー寝ていた。
「乙女の布団で寝るな！！このボケ！！」
渾身の踵落とし。
「うわぁっ！？」
ガバッ！！
ジョニーは、ぜぇぜぇと息を切らせながら額の汗を拭う。
「お、おう、蘭たんか。あぁ参った！嫌なを夢見たよ」
「へぇどんな？」
蘭のさっさとどけ！オーラが寝起きでいまいち察していないようで、微妙に目も虚ろだ。
「いや、でっかいハンマーで叩き潰される夢。もう、びっくりした！」
「ふ～ん、結構夢に反映されるのねぇ…」
「へ？何さ、ハンマーで撲殺しようって寸法か？」

「というかさっさと布団から出なさいよ！加齢臭付いたら新しいのに代えて貰うからね？」
「酷いなぁ。でも香水使ってるせいか、この羽毛布団良いにおいがするのな？」
無言で踵落とし。「そうか、それか…」と腹を押さえながら布団から出る。
「寝るんだったら隣に兄さんの部屋があるからそっち使って！」
仁王立ちの蘭は背中のドアを親指で指して、少し怒る。
へいへい、とジョニーも素直に言う事を聞くことにする。
「そうだ、明日から俺も学校に付いてくぜ？そんじゃ、おやすみ～」
はぁ、と深いため息。
平和な日常が壊される予感。

## 朝日は昇る：１（後書き）

もしよろしければ感想もお願いしますm（＿＿）m

## 朝日は昇る：２（前書き）

投稿が遅れた理由を一つ。

上腕二等筋が剥がれました＼（＾Ｏ＾）／

## 朝日は昇る：2

「眠れない、眠れない、眠れない！」
ベッドで布団に包まって呟く蘭。只今午前3時。
壁一枚挟んだ隣の部屋から大音量のイビキが聞こえてくる。部屋まで行って口にティッシュでも詰めようかと考えたが、頭で思うだけで体にはそんな気力すらない。

「蘭おはよう。あら、どうしたのその顔？夜更しでもしたのね？」
母の言うとおりだった。髪の毛は色んな部分が跳ねているし、目はどう見ても半開きだ。蘭も瞼を開けようとしたが、言う事を聞かない。
目を擦り椅子に座ると朝食に手も出さず猫背でひたすら座っていた。
「蘭？」
母は蘭の肩を揺さ振る。
「へ、は！へへへ、意識飛んだ…」
「もぉ…」
どうにもこうにも眠さが取れないので顔を洗うことにする。
「あ、おはよう…」
「おう！」
鏡を見ながら整髪用のジェルで髪が固めるジョニーがいた。
「よく眠」
すかさず顔面に拳がめりこむ。手に持っていたジェルのチューブを落っことす。
拳が離れるとジョニーは顔を抑えて低く呻く。
「眠れるわけないじゃない、この、イビキ魔が」
声のトーンは眠さで落ち気味だが確実に殺気が混じっていた。
ジョニーは蘭の目を見ると少しだけ申し訳なさそうに苦笑いする。

「ははは、ごめんよ。枕が代わるとよく眠れないんだ、あは、あはは…」
「それで、イビキ、かくっ、ての？へぇ…」
カクンカクンと蘭の頭が上がったり下がったり。
「まぁ朝の風に当たれば眠気サッパリだ！わっはっは！！」
そう言うとさっさと洗面所を出て行った。
蘭も顔を洗う事にする。

「あのねぇ…」
紅葉の口から出るのはこれと溜め息ばかり。元気一杯、気分爽快、健康野郎の紅葉と並んで歩く蘭の健康状態はほぼ真逆。体調不良、気分低迷、不健康娘である。
「昨日はあれだけ寝なさいって言ったのに！」
紅葉の口調はもう説教染みていた。
「んな事いったて、オッサンのイビキが…」
蘭は目一杯の欠伸を目一杯噛殺す。
少しだけ紅葉は考えてから「オッサン？」と呟いた。蘭も「そうそう」と普通に返す。
「…何で椎名崎家でオッサンのイビキが原因で寝不足になる訳さ？確か、お兄さんもお父さんも居ないでしょ？」
しまった！蘭はそう思った。別に奴（ジョニー）がばれるのＮＧとかは無いから良いが、弁明のしようがない。
「え、そのまぁ、あれよ、ほら…」
「じー」
疑念を込めた視線を蘭にぶつける。蘭もどうしようかなぁ、と言葉に迷う。
「よう」
助け舟の如しタイミングで悠太に後ろから声を掛けられる。
「おぉ！悠太君おはよう！」
元気に手を挙げて返事をする紅葉だが、蘭は「お、おはよぅ…」

と小声だ。
紅葉は蘭に一瞥を投げると、声無くにひひっと笑うと、悠太の方を向いた。
「ねぇねぇ、聞いてよ悠太君。蘭がさ、家に男連れ込んで眠れないって言うんだよぉ～？」
「はぁ！？」
悠太には珍しい高いトーンの声。おまけに眼もカッと見開いて蘭を凝視する。
「紅葉～！違うでしょ！」
「嘘吐け、じゃあ何で顔が赤いんだよ？」
「こ、コーラで酔っぱらっちゃったの…」
昨日ことを思い出しながら、恥ずかしそうに言う。
悠太は少し間を置いてから蘭の両頬を掴んで引っ張る。
「う゛～～～～～」
「おりゃ、おりゃ」
並木道の真ん中で「ま゛～～～～」とか唸っている蘭とエンドレスで頬を引っ張る悠太の周りを登校中の生徒が少しだけ避けて通る。男子も女子もひそひそと噂しながら二人を見る。
「そりゃ、ほれ」
悠太の顔はひたすら冷めている様にも見える。
「紅葉ぃ～こいつ止めてぇ～～。……あれ？紅葉？」
悠太もつられて手を離すと、蘭はすかさず悠太から距離を取って飛び蹴りをかます。
「おんどりゃぁぁぁぁぁぁ！！！」
文字通り蘭は飛んだ。
悠太がヤバいと感じた次の瞬間には、「ぬはぁ！」と声を上げる。
腹の辺りを抑えて項垂れると深呼吸して蘭を見る。
「この暴力女が…だけどな、足なら負けねぇ！」
悠太はガバッ！と１８０度方向転換すると校門に向かって一直線に走った。

「待ちなさいよ！」
颯爽と駆け抜ける二人を爽やかな秋風が包み込む。何だかんだで蘭は幸せだった。
二人は教室のある5階まで一気に駆け上がる。二人の距離は縮まりそうで縮まらない。
二人とも何も言わない。ただまっすぐ教室を目指した。
あっと言う間にクラスの教室へ。目を合わせるとクスクスと笑いだした。
「な～にやってんだろうね、あたしら」
「確かにな」
微妙に滑りの良くない扉を開けて教室に入ると紅葉が缶のミルクティーを飲みながら一人佇んでいた。
盛大に息を切らしながら教室に入る二人は紅葉を凝視した。
「青春を、ありがとう！」
紅葉は二人に最高の笑顔で答えた。
その後3人は拳で語り合った。

「おい、紅葉ちゃんと悠太君はどこ行ったんだよ？」
「あ、ジョニー…」
一人屋上でサンドウィッチを食べていると、ジョニーが何処からともなく現れた。
ジョニーは蘭の横によっこらせ、と座ると、買ってきたばかりの缶コーヒーを威勢良く開けて一口飲んだ。
風のそよぐ屋上は奇遇にも人が少なかった。フェンスに寄りかかって佇む人、しゃがみ込んで自分なりに悲しさを堪える人、人それぞれ一人で居たい気分だ。
「えっと、二人は委員会とか私用とかで居ない」
「そっか…」
それきり二人の間に会話は無かった。考えてみれば共通の話題は少ない。テレビなんてものは人間世界に降りて来ないと見ないし、

芸能人なんて言っても次元が違う。
かと言ってジョニー自身、蘭の愚痴の捌け口の様な存在ではいけないと思っていた。そういう立ち位置に甘んじていては実らせる恋も実らないような、そんな気がしたからだ。
救済(らん)対象には自分で考えて自分なりに行くべき道を模索して欲しかった。
自分は道の途中にある灯り。決して行くべき道を正確に指し示している訳ではない。そうでありたかった。
「ねぇ」
そこでジョニーは考えるのを止める。
「ん？どうしたんだ？」
「先ずはさ、あたし自身どうしたらいいか教えてよ」
ジョニーは少しだけ驚いた。今までの流れなら「キビキビ働け！」とか言われそうだったが、なんだか切実な願いを言われているようだ。
「え、まぁなんだ、先ずは気の持ちようだ。これ肝心」
人差し指をピンと立てると自身気に立ちあがった。
「気の持ちよう？」
「当たり前だ。今の蘭たんからは覇気が感じられんなぁ。もっと好意丸出しでもいいかな」
「うっさい！」
頬を赤らめてそっぽを向く蘭。それを見てジョニーは何だか昔からの付き合いのように思えてきた。
だが蘭もその内また俯き始める。大きくため息を吐くと怒られた子供みたいにしょんぼりしてきた。
「好意っていってもどうしろってのよ…」
「ならば先駆者に聞けば良い！」
蘭はへ？と一言漏らすとジョニーの顔を覗き込んだ。ジョニーは缶コーヒーを飲み干すと少し先のゴミ箱に投げ入れた。
「身近にいるじゃないか」

「紅葉？」
「おうよ。ありゃすごい、何ちゅうかさ、愛は地球を救うを擬人化したような、そんな感じのオーラが出てるんだよあの子」
まぁ分からない事もないわね。そう思うや、バッっと立ち上がりジョニーに言い放った。
「善は急げよ！」
勢い良く駆けだすと颯爽と消えるように立ち去った。
「元気がいいわなぁ…」
年季の入ったベンチに寝転んで流れる雲を見つめた

## 朝日は昇る：3

「ダーリンに会いたい～？」
「そ、そうなのよ…」
紅葉は蘭が何をしたいのか分からないといった表情である。
「まさか、謀反か！？謀反なのか！？」
「別に奪ったりしないわよ！」
授業が終わり喧騒に包まれてくる教室。やっと蘭は紅葉に話を持ちかけた。
「なら、何で……いや！待った！裁判長、少し考える時間を！」
そう言うと顎に手を当て、う～むと唸りながら目を瞑った。
蘭はいつも通り立ち尽くしてその様子を見届ける。
そして、紅葉は突拍子も無く目を見開くと机を思い切り叩いて立ち上がった。
「椎名崎さん、確か私のダーリンつまり、八十寺（はっしんじ）康太郎と美海悠太は同じテニス部ですね？」
何故かホームルームで配られた「ＰＴＡ便り」手に持って、妙に真剣そうな聞こえる声で蘭に質問する。
「え、確かそんなような気が…」
「という事は、同じ部活で親しいのを理由に相談を持ち掛けると？違いますか！？」
「そ、その通りよ！」
少しだけ恥ずかしそうにする蘭。その顔を見た紅葉は途端に不敵な笑みを浮かべた。
「あたしら夫婦で仲人やらせたいわけねん？手伝ってあげるのだ！さぁそうと決まれば出発進行！」
軍隊の行進の様に鋭い足踏みと腕振りで紅葉は歩き出した。
「ちょ、ちょっと待ってよぉ～」
蘭は鞄に教科書やら電子辞書やらを無造作に押し込んで紅葉に駆

け寄る。

紅葉が連れてきたのは校舎の2階だった。放課後にも関わらずこの階にだけは喧騒が無い。あるのは職員室や事務室、図書室など比較的騒がしくならない部屋が集中しているのがその理由だ。

そして、紅葉が立ち止まった部屋には「生徒会室」と書かれたプレートが貼ってあった。

「あ、そうか康太郎君って生徒会長だよね」

「というわけで、あ、た、し、は会長夫人〜ふふふ〜ん♪」

ダーリンの事になると殊更紅葉は上機嫌になる。鼻歌なんか歌いながらゆっくりとドアを開けた。

ドアの向こうにはどこかの社長室を思わせる空間が広がっている。手前には大きなソファが高級感のある机挟んで並び、奥には大きめのデスクと一人用のオフィスチェアが整然と存在していた。その一つ一つがこの部屋の重厚さを醸し出している。蘭は正直驚いた。

「お、紅葉か。よく来たな」

ノートパソコンの後ろから少しだけ顔と手を挙げて訪問者に答える人影があった。八十寺康太郎である。

紅葉はそれを聞くとオフィスチェアに座る康太郎に近づき抱きついた。

「ダァリン！元気にしてた？ちゃんとご飯食べてる？」

康太郎の手を自分の頬に近づけて擦った。

「おいおい、さっき一緒に昼飯食っただろ？」

この時ほど微笑ましいという言葉が当てはまる状況（シーン）は無いと思う。蘭は茫然と立ち尽くして二人の様子を羨ましい様な、妬ましい様な気持で見ていた。紅葉絡みの時っていつも突っ立てるだけじゃないかしら？ともふと考えた。

微笑ましい限りのカップルは暫し歓談していたが、康太郎は一瞬だけ蘭を視界に捉えると「おっと」と一言漏らしてスッと立ち上がり、蘭の方に近寄った。

「はは、お見苦しい所をお見せしてしまって申し訳ない。八十寺康太郎と申します」
苦笑いをしながら蘭に握手を求めた。
「あ、椎名崎蘭です。はじめまして、でいいのかな？」
康太郎の手は実に貫録があった。同い年の人間とは思えない、人生経験はあたしの2倍はある、と手から直感的に感じた。
顔立ちも決して悪くない。いやむしろ整っている方だが、所謂（いわゆる）イケメンの部類ではなかった。一言でいえばダンディ、その部類である。きっと年を重ねると味の出るタイプなのであろう。
それに制服のネクタイを微妙に緩めている男子が圧倒的に多いのに彼はワイシャツ第一ボタンまでしっかり絞めてネクタイもそれに吸いつくようにピッタリと付けていた。ほかの部分も一緒だった。首のネクタイに始まり、ブレザーは埃のひとつも無く、足に履くローファーも黒光りする程きれいに磨かれていた。
「あなたが椎名崎さんですか！いつもハニー…おっと紅葉から話は伺っております」
「あ、そうなんだぁ、ははは…」
ダーリンにハニーかぁ、何だか憧れちゃうねぇ。なんちゅう青春や！
「え？」
蘭は辺りを見回した。そこにはソファに腰掛けるジョニーが居た。
何であんたがそこに居んのよ！目で合図すると、「興味本位だ」とだけ答えた。蘭以外の人間には姿どころか声も聞こえないらしい。
「どうかなされました？」
「いや、何でもないの！気にしないで！」
「そうでうすか…。さて、今日はどの様なご用件で？部活新設の申請？先生方への委員会への要望？」
蘭の前に現れたのは生徒会長では無く、もはやオフィス街の男だった。あまりの品の良さにつくづく感心していた蘭だが、恋の相談とは恥ずかしくてなかなか切り出せなかった。

それを察してか紅葉が代わりに口を開いた。
「実はだね、あたしの親友の恋の悩みを聞いて欲しいんだよ！」
紅葉は蘭の頭を撫でながら自慢げに言う。蘭も頬を赤らめて小声で「うん」と頷いて縮こまる。
「あぁ、なるほど。僕がどれだけお力になれるかは分かりませんが、紅葉の親友の方のお願いとあらば喜んでお引き受けしますよ」
「うう、ありがとう…」
蘭は康太郎の手をそっと握った。その時に少しだけジョニーに目配せすると腕を組んだまま眠りこけていた。
「じゃああたしは部活だからダーリン、蘭のことよろしくね！！」
そう言うとそそくさと部屋を後にした。
康太郎は部屋の外まで紅葉を見送るとドアをまたゆっくりと閉めて蘭に微笑んだ。
「ささ、どうぞ座って」
と言って蘭の脱いだコートをさっと受け取るとハンガーラックに丁寧に掛けた。
蘭は座ると必要以上に体が沈みこむソファに座り込んむ。
「そうだ、飲み物はコーヒーか紅茶のどちらに？」
「いや、飲み物なんていいよ！何か申し訳ないし…」
「まぁそう言わずに、ね？」
康太郎のウィンクに一瞬だけ蘭はドキッとする。高校生っぽさこそ無いがこの落ち着いた感じが新鮮だ。
きっとこの人もさぞかしモテるんだろうなと思いつつ、紅茶を頼んだ。
年季の入った電気ポットを棚から取り出すと手早くティーセットも用意して熱々の紅茶を用意し始めた。
「いや、やっぱり噂どおりの可愛らしいお方だ」
ティーカップにゆっくりと紅茶を注ぐと、唐突に口を開いた。
「え？」
「いやね、うちのクラスにも蘭さんのファンがいるんですよ。たく

さん」
「嘘だ〜。そんなの信じられないよ〜」
「いやいや、本当に。実際可愛らしいじゃないですか。…はい、紅茶です」
そういって康太郎が机に置いた紅茶のカップは二つ。もう一つはちょうどジョニーが座っている前に置いた。
「え？あの、あたしは一人だよ？」
蘭は動揺する。隣に座っているジョニーを肘で突いた。
な、何だ？地震か？
「何言ってんのよ！前見なさい！」
極力小さい声で答えた。
ああ、見えてんのか？なら話が早いな。
一方の康太郎は微笑むと会長用のデスクに座り込んだ。
「もう見えてますよ。きっと恋課の方ですよね？」
康太郎の目線は明らかにジョニーに向けられていた。
「そうか、君もだったか」
「ええ、そうなんです」
「え、なに、どういう事？」
蘭は男二人がいきなり打ち解けているのを見てよく状況が掴み切れていなかった。
「なぁに、簡単なことだ。彼も蘭たんみたいな状況だった頃があったてことさ」
康太郎のの肩をポンと叩くと、
「そう、彼の言う通りなんだ」
康太郎も答えた。
ジョニーによると一度神の世界の存在と接触するとジョニーの様な存在がずっと見えるらしい。
「最初に紅葉といらっしゃった時に紅葉には見えていないようでしたので。少しだけ様子を見させてもらいました」
爽やかな微笑みで返すと「冷めない内に」と紅茶を二人に勧めた。

二人も応えて紅茶を少しだけ飲む。ジョニーはさっさとティーカップを置くとジャケットの内ポケットから何時かに見た不思議な携帯端末を取り出して液晶パネルを指で軽快に突いた。
「そういえば、康太郎君の担当って誰だった？覚えてる？」
「忘れるはずありません。名前はアナスタシア。アナスタシア吉武と言っていました」
ジョニーはふと指の動きを止めたが、また直ぐに指をポンポンと動かす。
「そ、そっかぁ、アナスタシアかぁ…。あいつ未だ新米だからさ、迷惑かけたんじゃなかったかな？」
妙に高い声で答えるとジェルでガチガチに固まった頭を掻く。
「あのさぁ、そっちの世界の人ってみーんなそんな感じの名前なの？」
康太郎の代わりに蘭が先に声を発した。おまけに「みーんな」を強調して言った。
「それがこっちでは普通なんだよ。欧風な名前と日本風の苗字で命名をするんだ」
「それはなかなか興味深いですね。そういった慣わしなのですか？」
康太郎は心底興味深そうに尋ねた。
ジョニーも食い付いてきた！と言わんばかりに笑顔になって一呼吸置くと、
「まぁ最近の流行かなぁ…結構昔からかな、こういう名前のつけ方」
「やっぱり売れない芸人じゃん…」
蘭が水を差す。
「名前を馬鹿にするんじゃありません！」
「なぁによ！！！！」
蘭が足をジョニーの顔面に押し付けたりジョニーが蘭の頬を抓ったりして意味不明の構図に成りつつあるので康太郎が柔らかな物腰で仲裁に入った。
「…まぁでもこれで蘭さんをサポートする体制は整いましたし、き

っと大丈夫です、ね？」
蘭は両頬を真っ赤に、ジョニーは上履きの底の跡を顔面につけて康太郎を睨んだ。喧嘩に水を差されるのを嫌うという点では一致していた。
二人の視線の鋭さに一瞬だけ顔を引き攣らせる康太郎であったが、二人の肩にそっと手を当てると落ち着きを取り戻した。これも康太郎の人徳がなせる業か。
「ま、俺は紳士だからさ、これ以上大人気ないことしないから」
十分大人気ないような発言だが、ジョニーは嫌に語尾を上げながら蘭に言った。
「紳士とか言って、変態という名の紳士でしょうが！」
「ぎゃーＪＫがイジメルー」
何年、ましてや何ヶ月も生活をともにしていない二人だが友情とも愛情とも言えない確かな絆で結ばれている様に康太郎の目には映った。そして自分もアナスタシアと過ごしたひと時を思い出す。
アナスタシアは今どうしているだろうか？何年も会っていない昔の学友を思う様にふと心に浮かんだ。
「あの、アナスタシアは元気にしていますか？」
ジョニーにふと聞いていみる。ジョニーもうんと大きく頷いて「モチのロンだよ」と言うので安堵を覚えた。
「あの、アナスタシアにもう一度会えないものでしょうか？」
「余裕だよ、余裕。みんな意外と土日とかに人間世界に来て買い物するんだよ、ＤＶＤとか。今はアメリカのドラマが流行ってるみたいだな。超能力者がわんさか出るやつとか」
聞いてもいないのに余計なことまで話すジョニーにへぇ～と低い声で反応する蘭。一方の康太郎は嬉しさで笑みが零れた。
「直ぐにでも会えるのですか！？」
「う～んどうだろ、今は結構忙しい時期なんだよねぇ…。ほら、恋課って意外と出張多いから」
「確かに…。でももし次に会える時があれば…」

「まかせんしゃい！」
わざとらしく胸を拳で叩くと思いっきり笑って見せた。康太郎にもその笑顔は頼もしい。
「あたしの恋路～」
またもや蚊帳の外の蘭は微妙に不服なようだ。本来この場に三人が集まっているのは蘭と悠太の縁を取り持つのが目的であって、康太郎の思い出話では無い。
「あ、それならちょっとだけ考えたんですよ」
安心のセールスマンスマイルが炸裂し蘭のテンションは上がった。
「ほ、ホント！？」
「えぇ、ですが蘭さんの頑張りに懸かっている部分も少なからずありますが…」
「どれどれ、おじさんにも聞かせてよ」
夕陽の差し込む生徒会室で三人の作戦会議が始まった。

## 朝日は昇る：3（後書き）

まだまだ続きますが「朝日は昇る」は今回で終了、次回は新しい章で投稿です！

これからもよろしくお願いします。

## 遊園地で昼食を：1（前書き）

長い間投稿が……

## 遊園地で昼食を：1

「いや！ちょっと、止めてよ！いいから離しなさいってば！！こんな所で…だ、抱きつかないでよぉ……」
「何と言われようが放さない。というか、離せないんだよ…。か、体が言うこと聞かねぇんだ」
不気味とも言える暗闇の中で蘭を背中から強く抱きしめる悠太。蘭の体は今にも折れてしまいそうだ。
蘭は頬を微かに染めて、必死に離れようとともがく。
「お願いだ、離れないでくれ！」
「悠太のバカぁ……。意気地無し！ヘッポコ野郎！あぁもうこの鈍感男！」
「お前に何と言われようと絶対に離さないからな！」
一方の悠太の目は真剣そのもの。蘭を見つめるその眼に曇りは無い。だが、悠太があまりにも蘭を凝視するので蘭もほんの数秒目を合わせるのがやっとである。
悠太が蘭の腰にしがみ付く形で二人は硬直する。蘭はどうしようかとため息をつく。このままでいたい自分と世間的にアウトだろと語る自分が脳内でエンドレスの論争を繰り広げる。

「遊園地？また何で…」
悠太の蘭を見る眼が細くなる。
今日は久しぶりに二人だけでの下校だった。久しぶりに一人で家路に着こうとしていた所を蘭と出くわした。悠太からしてみれば偶然だが、蘭にとっては必然の出会いであった。
部活に所属していない蘭はどのタイミングで帰るのも自由。今日は悠太が一人だと聞きつけて下校のタイミングを合わせた。
少し前なら偶然を装うような小細工をしなくても一緒に帰る事ぐらい当たり前だったが、妙な意識が蘭を押さえ付けている。

「そ、そうよ！遊園地！時代は遊園地なの！ジェットコースター、観覧車、お化け屋敷！まさにヤックデカル」
「あほか！」
拳を蘭の脳天に落とす。蘭は「チャァァァァ！」と悶絶しながら叫ぶと、悠太を睨み付ける。
「あんたサイテー！こんな可愛い乙女を殴るなんて！」
「うるせぇ！あのまま喋らせちゃいけねぇ様な気がしただけだ」
蘭は自身の頭を叩く様に払うと、一呼吸置いて悠太を睨みつけた。
「んで？行く、行かない？」
「どうっすかなぁ…。暇と言えば暇だしな。まぁ断る理由はないがぁ……」
返事を聞かない内に蘭は後ろのほうにある電柱を一瞥した。すると二つの影がゆっくりと蘭達の方へ近づいてくる。
「へぇー。遊園地かー。いいなー。あたし達も行く予定なんだけどなー。奇遇だなー」
「そうだなー。ダブルデートもいいかもなー」
棒読み丸出しの台詞で存在感を醸し出した紅葉と康太郎が現れた。
「っておい！脅かすなよ。まったく…」
「そうよそうよ！なら皆で遊園地行こうよ！はい決定、マジ決定」
はしゃぐ3人を尻目に悠太は溜息をつく。やれやれと思いつつも、まぁいいかと思う。
蘭とは腐れ縁で昔から良く遊んでいる。いつもくたびれている自分が思い出されるが決して面白くないなんて事は無かった。
「まぁ、行くか」
悠太がふと呟くと、3人は声を上げてはしゃいだ。実際にはジョニーも一緒になってはしゃいでいたが、蘭と康太郎にしか見えていなかった。
「いやぁ、頑張ったなぁ」
蘭のベットに寝転がりながらジョニーは拍手をする。傍らに置い

てあったポテトチップスをバリバリ音を立てながら食べるとまた拍手をした。
「人のベットに入るな！ベットの上でポテチ食うな！」
空を切る速さのチョップが蘭の右手から繰り出されたと同時にジョニーは頭を抱えて涙目になっていた。
「脳天が…割れる！！」
痛みが早く引かないかと頭を振り回してみたり布団に包ってみたりした。
数十秒間の痛みとの格闘の末、ジョニーは平静を取り戻した。
「でもまぁ高校生らしいな。良いよなぁ。気の合う仲間と遊園地、か。まぁ大人になると飲み屋になるんだけどな！」
がっはっはと盛大に笑うが蘭にはそこまで面白くなかった。ジョニーも笑いのセンスがずれてるなと自嘲する。
「まぁ俺はその日は邪魔しないからさ、ゆっくり行ってきなさいな」
「ホントに！？」
蘭は途端に目を光らせる。ジョニーが嫌いと言う訳でもないが、いつも見られている様な気がして落ち着けなかった。そのせいか、見られていないと分かると蘭には妙な嬉しさが込み上げる。
「ひっでぇ奴だなぁ。少しは寂しがるとかしなさいよ」
「別に寂しくないもん。あぁ、開放感があるぅ～」
説教染みた言葉を並べ始めるジョニーを笑顔で放り出すと、蘭はクスクスと笑いながら床についた。
ジョニーもそうだが蘭にとってはやはり、悠太と居る時間が一秒でも増える事が嬉しい。高校生になってから少しだけ開いた距離を埋める絶好の機会だ。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9103f/

---

レンカのオシゴト！

2010年12月3日22時30分発行